

強制結婚

戸川昌子



結婚

戸川昌子



Tomiko
naga.

強制結婚 著者 戸川昌子 発行日 昭和47年2月10日
発行者 徳間康快 印刷所 金羊社 製本所 明泉堂
発行所 徳間書店 東京都港区新橋4の10 郵便番号105
電話(433) 6231 振替 東京44392 0093-128455-5229

強制結婚 目次

二重奏

フラメンコの肌

黒い柩

女の鑑別師

金髪水揚げ

ラブ・スクール

魔女の協奏曲

奴隸市

パーティーの辛味

制服の誘い

青い交配

227 203 181 157 135 113 93 73 51 29 5

裝幀・插繪
宮永岳彦

強制結婚

戸川昌子

二重奏

1

沢井は、いそいそとモーニングのそでに腕を通した。不思議なもので、このナフタリンの匂いをかぐと、気がしゃんと引きしまるような気がする。

沢井は、五十代になってから、もう一度結婚式を挙げようとは夢にも考えていなかった。

妻に死なれたのは五年前である。息子も娘もすでに一人前になっているし、自分でも再婚ということは一度も考えたことがなかった。

もつとも、今でも後妻をめとるというつもりはないのだ。

「お父さん、教会で相手の女と接吻することになったら、ちゃんと出来る？ 向うの風習では、たしか接吻することになっているはずよ」

「そんなことは聞いていないが、なんでも社長のするとおりにするよ。ひとりだけで結婚式を挙げるわけじゃないから、気楽なものだ」

「嘘おっしゃい。お父さんはさっきから興奮して緊張しきってるわ。でも、こうやってパパが活き活きしているのを見ると、本当に若い娘さんを後妻にさがしてあげたいと思うわ。そうだ、あたしの同級生に聞いてみてあげよう」

娘の奈代が、沢井を冷やかした。

「馬鹿を言いなさい！」

沢井は大きな声を出したが、内心を見すかされたようできくつとした。

もしも、自分の娘のような若い女を本当に妻に出来たら——新婚旅行をし、一緒にベッドへ入り、毎日ネクタイをしてもらえたら——そう思うと息がはずみ、胸のあたりに熱いものが広がるのを覚える。

二十一歳になる娘の奈代の肉づきのいい腿を見てみると、父親としてよりも男としての衝動で、はっとなってしまうほどなのである。

「パパはママが死んでから、浮気をしたことはないの。だって男のひとって、女がいないと我慢出来ないんですよ」

娘が父親の沢井をからかうときは、きまってパパと呼ぶ。

デザインの学校へ行き、自由な交友関係を愉^{たの}しんでいる奈代は、兄夫婦に向っては平気で、自分には性体験があるなどと、むしろいばってみせてたりしているらしい。

さすがに父親の前ではそんなことは言わないが、時折、そんな沢井の耳にも奈代のことが入ってくる。彼は、もはや子供たちのことは諦めていた。

つまり、完全な放任主義だったのである。

しかし、こうして同じ屋根の下で、なんとかかんとか暮しているからには、一応、仲のよい親子なのだろう。

そう思って、子供たちのことには絶対に口をはさまないようにしている。

妻の実家が有力者だったので、沢井はサラリーマンとしては早い時期に、広い土地つきの家を持つことが出来た。

会社でも比較的順調にすすみ、腕をふるうタイプとも思われていないが、そのかわりに敵もいない。

女も積極的につくるわけでもなく、すべてが平穩無事なのであった。

そこに降って湧いたようなのが、今度の結婚だったのである。

「馬鹿を言いなさい」

沢井は、半分苦笑いをしながら、娘の質問をたしなめた。彼が家族たちに言う言葉は、もっぱら「よし、よし」か「馬鹿を言いなさい」のどちらかだった。

「せっかく結婚式を挙げるのだから、ちゃんと肉体的にも交渉を持ったらいいじゃないの。金髪のフランス娘を妻として大いばりで抱けるなんて、滅多にないチャンスよ」

「いい加減にきなさい。この結婚はあくまで形式的なものです。何べん説明したらわかるんだね」

沢井は、ワイシャツのカフスボタンを娘にとめてもらっているの、片方の手が自由にならない。娘の髪が、沢井の鼻先をくすぐった。俯向いた襟もとから、若い女の甘酸っぱい体臭とフランス香水の香りとが入りまじって、沢井を瞬間的にめくるめく思いにさせる。これから教会で結婚式を挙げる相手のフランス人の女も、たしか二十一か二なのである。

社長のほうは、相手と肉体的な交渉を持つつもりな

のだろうか。

いや、そんなことを考えるのはやめるのだ。どんなことがあっても、沢井の身の上にそんなことが起こるはずがない。

すべては夢なのだ。空想なのだ。妄想なのだ。

ただ、形式上の結婚式を挙げるだけではないか。区役所の書類をととのえるために、名前を貸すだけで済むことではないか。

それがたまたま社長の気まぐれのために、馬鹿馬鹿しい結婚式を挙げることになっただけのことなのである。

「さあ、落ち着け！ もう馬鹿なことは考えるな」

沢井は、今度は自分自身に言い聞かせた。

「だって形式上のことだけなら、区役所に届けるだけのことだっていいじゃないの。第一、パパを相手にしなくても、いくらでも名前を貸す人ぐらいいるわ。観光ビザだけで日本に来た外人のタレントは、正式に働けないから、短期間、形式上の結婚をするっていうん



でしょう」

「書類だけの結婚式をすると、関係官庁がうるさいんだ。ちゃんと結婚式を挙げて、同棲しているという実績がなければ仕方ない。それに今度の場合は、向うのタレントが、いい加減の相手では困る、身元のしっかりした、経済上の責任を持つてくれる相手じゃなければ困るということで、社長が自分で結婚の相手をする事になったんだ」

「そのフランス人の女性タレントが二人一組でくるから、片一方のほうをパパが受け持たなくてはならなくなったんでしょう」

「そうなんだ。馬鹿馬鹿しいことだが、社長の方針だし、仕事のう



ちなのだ」

「パパの会社の社長って、このまえ週刊誌に出てたけれど、とても変ったひとなんですってね。三十九歳でまだ独身で……大金持で、いろんな企業に片っぱしから手をつけるんでしょう。清涼飲料水から、高利貸から、社会事業、音楽学校の理事から外国タレントの呼び屋と、なんでもやるんでしょう。お金はあるし、あんなにいい男なのに、女は全然いないの。ホモなのかしら……」

「そりゃ、女の一人や二人ぐらいはいるだろうが、社長のプライベートなことは何も知らん……」

沢井は、モーニングのネクタイをもう一度結び直した。つけ馴れ

ない高いカラーが、どうにもきつかった。

目の前に、G・M興業の社長の望月雅也の日本人ばなれのした、意志の強そうな顔が浮かんた。そのくせ、未だにどういう人間なのか沢井にも掴めない男なのである。

八年前に、沢井の会社が望月のところに吸収され、それ以来、望月という男は畏敬と全能者という重みで、沢井の上にのしかかっていた。

沢井の仕度が出来上ると、会社からさし向けられた車に乗りこんだ。

社長の厳命で、社用でありながらプライベートなことということで、会社や近親者の出席は一切禁じられていた。

この結婚式自体を極秘のうちにこなおうというのであった。

娘の奈代が、どうしても出席したいというのを、沢井はやっと思いとどまらせた。

「おまえが来ると、父さんはすっかりあがつてしまい

そうだから勘弁してくれ。それに何度も繰り返すが、社長の結婚は極秘だからね、マスコミ関係に知られると困るのだ。わたしのことも、近所の人に聞かれたら、他人の結婚式に行くのだと言っておくれ」

「決まっているじゃないの。パパが再婚するだなんて、みつともなくて誰にも言えやしないわ」

今度の娘の返事は、冷たいものであった。誰も本気で自分の再婚のことなど考えてはくれないのだと、彼はふと淋しさを感じた。

2

麴町にあるキリスト教の教会に着くと、すでに会社の総務部の男が待ちかまえていた。

「部長、ご苦労さまです」

半分、冷やかすような好奇心に満ちた目で沢井を見つめる。

「この年で、二十歳そこそこの娘と結婚式とは情けな

いよ」

「いや、部長は幸運ですよ。式が終ったら横浜のホテルに新婚旅行に行くって言う話じゃありませんか。羨ましがって、地団駄を踏んでいる独身の社員だっているんですよ」

「馬鹿を言いたまえ。横浜に新婚旅行だなんて、わたしは聞いていないよ」

沢井は急に不機嫌になってきた。

実際に、新婚旅行のことなど聞いていなかったのだ。もし、本当に新婚旅行に行くことにでもなったら——そのことを想像するだけで、額に脂汗が滲んでくる。激しい期待が、一種の不安になって、沢井の胸をしめつけるのだった。

「社長は、あと十分ほどでこちらに着かれるそうです。それまで控室のほうで、お待ちになっていてください」
総務課の男は、沢井をひんやりした教会堂の一室へ案内すると、相変らず冷やかしかつ半分の顔でいなくなつた。

沢井は、控室のテーブルの上に飾つてある菊の花を見つめた。

今までに外人の結婚式に一度出席したことがあるが、たしか新郎と新婦は別々に控室から出て、祭壇の下に立つた牧師のところまで静々とすすむはずだった。

今日の司会の牧師は、カナダ人の宣教師で、フランス語の出来る外人をということで、わざわざ捜してきたのである。

へまさか、新婚旅行に行くことはないだろうな。向うは日本語を一言も喋れないのだし、こっちもフランス語なんてチンプンカンブンなのだ……」

沢井はひとりでそんなことを考えていると、燕尾服を着た望月が颯爽と入って来た。

一メートル八十センチ近いこの男は、こういう外国の礼服を着せてもよく似合う。ちょっと鋭さのある彫りの深い顔が、一層映えるのだ。

沢井は望月に最敬礼をした。今まで個人的に、胸襟をひらいて話をしたことはないし、一向に掴みどころ

のない、自分よりも若いこの男の前に出ると、一種の威圧感が先に立ってしまふのである。

新婚旅行のことも、社長自身の口からはつきり聞こうと思つていたが、それも出来なかつた。なんとなくしどろもどろになり、意味のないことを口にしただけだつた。

「この年になつて、結婚式などと思つてもいなかつたものですから、どうも勝手が違つてしまひまして……」

「少しくらい、あがつてくれていたほうが真実性があつていい。本番になつたら、この女と結婚するのだと本当に思つていてくれなければ困る」

望月は腕の時計を見た。百万円以上するであろう、高級時計であつた。

「まだ五分ある。すべてスケジュールどおり正確にやろう」

そういうときの望月の声は、冷たい鋼鉄のような意志と冷たさを思わせる。この男が大口の債権者として、経営不振になつた沢井のスーパー・マーケットに乗り

こんできたときのことを思い出した。

沢井たちの会社のスーパー・マーケットの企画はよかつたのだが、日本では少し時機が早すぎたのだつた。その後のスーパー・マーケットの大半は成功しているのだから……。

沢井の胸を、七年前のことが複雑な感慨となつて横切つた。

「そのスケジュールのことですが、式のあとはどうなるんでしょう」

「きみのほうには、まだ連絡がいつてなかつたかな。マスコミ関係の連中にかぎつかれて写真を撮られたりするところさからね、一時間先のスケジュールはすべて極秘にしてある。きみにもその都度、知らせるよ」
沢井の都合をまったく無視して、それは独裁者の喋り方だつた。

そうなると沢井はそれ以上、一言も質問する氣力がなくなつてしまふのである。

「はあ……わかりました」

まるで自分がとんでもない質問をしたような錯覚にとらわれて、深く頭をさげた。

「式は三十分で終る。そのあとTホテルで簡単な披露宴をし、五時前には横浜のSホテルに入る」

望月がまた時計を見ながら言った。

Tホテルの披露宴も、横浜のSホテルも沢井には初耳だった。

しかし、Sホテルと聞いたとたんに、沢井の胸が早鐘のように鳴りはじめた。そのホテルをとったということは、新婚旅行をやるということではないか。

望月が、これだけの費用をかけて結婚式をやるからには、ただ形式だけということがあるだろうか。

時計でも装身具でも最高のものを使い、成功者になりがちな完全主義者の望月のことである。

新婚旅行もなにもすべて、本気でそのまま取り行なうのではないだろうか。

そうだとすると……沢井の目の前に、金色のうぶ毛の光る白狐のような女の裸が浮かんだ。

妻に死なれたあと、トルコ風呂にさえ行ったことのない生真面目さで生きてきた沢井であった。

社長の望月が、わざわざ結婚式のパートナーに堅物^{かたもの}の沢井を選んだのは、すべての儀式を本気でやらせるためではないか。

そうに違いないということが、だんだんと沢井にもわかってきた。

会堂のほうで、荘重なオルガンの結婚の前奏曲がはじまり、教会の関係者が「花婿の方はどうぞ」とドアの外で声をかけた。

沢井は反射的に立ちあがろうとしてふらつき、自分の貧血に気がついた。

そんな様子を見ながら、望月が軽蔑したような表情を眉のあたりに浮かべた。

花婿の介添人として、外国の商社から集めた若い外人の男が二人、控室の外で待っている。

彼等が、望月と沢井の腕をとるようにして、説教壇の前まで誘導した。沢井は顔がカッとほてり、足がも

つれるのを感じた。

反対側のドアから、オルガンの音にのって花嫁たちが入ってきた。

美しいチュールをあしらった豪華な純白の花嫁衣裳をつけている。

ベールで顔をおおっているが、金髪を波打たせている若い女のほうが、沢井の花嫁になるはずであった。

マドレーヌという名前で、沢井には未だに馴染めない発音だったが、こうして改めて見ると可愛らしい顔立ちで、まるでフランス人形のような顔立ち。すんなりとしたしなやかな身つきが、いかにも男たちの食指をそそりそうな女である。

この若く可愛らしいフランス人の女と、新婚旅行に行けるといふのだろうか——信じられないという思いが先に立ったが、それでも微かな期待で胸が震えた。

沢井は歩きながら、上目づかいに花嫁たちのほうを窺った。

マドレーヌと並んでいるイボンヌという女のほうは、

濃い栗色の髪をショートカットにしていた。きりっとした凛々しい感じの顔だちは、人というよりも個人的な魅力に溢れている。

踊りのときに見せる筋肉質の肌は、真白な花嫁衣裳で隠されて、内向的な女性に見える。

フランス人といってもアルジェリア系の血が混っているとみえて、目も黒い。

このイボンヌのほうを、なぜ社長が選んだのだろうか。

この疑問が絶えず、沢井の頭の中にあつたのである。最初、写真を見せられたときは、このイボンヌという大柄な、どちらかというと男好きのしない女のほうが、自分のほうにまわってくるとばかり思っていたのだ。

もしかしたら、社長はああ言っていたが、やはりあの髪の黒いほうとカップルにされるのではないだろうか。

沢井は、牧師の前に立ちながらそう思っていた。